

# 国際演劇交流セミナー 2017-2018

## *International Theater Exchange Seminar 2017-2018*

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長  
流山兎祥

日本演出者協会の国際演劇交流セミナーが始まって今年で 20 年の節目の年を迎えることになりました。関係各位に厚く御礼申し上げます。1999 年から文化庁の本格助成も始まって協会国際部は世界各国の演劇人と出会いワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディングなどを行う国際演劇交流セミナーを 20 年に渉って企画開催してきました。世界には、豊かで多様な演劇が存在することを学び、共有しあうことは演劇の根本である《他者》との出会いです。国際演劇交流セミナーは、日本演劇が思考してきている所謂、明治以降の近代劇＝欧米中心の思考をドラスティックに変え、演劇を必要とする世界各地の現代演劇のもう一方の豊かさ（オルタナティブ）を体験する旅でした。

2015 年には韓国、パレスチナ、オーストラリア、デンマーク、メキシコ、2016 年にはアフガニスタン、マカオ、ウエールズ、といった地域の特集。勿論、ロシア、フランス、イギリスといった国の演劇人との交流も同時に行っています。2017 年、2018 年の本合併号には韓国、フランス、台湾、アルゼンチン、スイス、デンマークとの試みの特集が掲載されています。わたしも参加したインドネシア、台湾、韓国の特集は貴重で面白い体験でした。わたしはインドネシアには 2 度公演してインドネシア演劇が如何に社会に、地域に根差しているか、その身体表現の豊かさの根源を共にワークショップすることで再確認しました。韓国演劇のトップシーンを牽引している劇作・演出家：パク・クニョン氏の独自のワークショップは日本の若手演出家にとって目から鱗のプレゼントになりました。今、韓国と並び最も芸術に力を入れている台湾のトップ・リーダー：汪兆謙氏のドキュメント演劇も多くの参加者を集め好評でした。また、アルゼンチンのエミリオ・ガルシア・ウエービ氏の「既成概念を揺るがす演出を～その創造のプロセスとは何か～」は京都と東京の 2 か所で各 6 日間開催し多くの参加者がアルゼンチンの鬼才と衝撃的な実験を重ねました。舞台芸術は既成概念の破壊とその後の創造の果てにあるのです。

世界中の地域の演劇人、演出家と出会い彼らが彼の地で実践している演劇の多様性を学び共有し、共に実験して、社会に向けて普及のための公演を行うことで日本の演劇人、とりわけ若い世代の演出家を育

成する事業が国際演劇交流セミナーです。演劇の持つ真の自由さを獲得し、社会という《他者》のために文化芸術は存在します。地球上、それぞれの場所の必要性から生まれる演劇の多様性を重視することはわたしたちの課題です。いま、世界はネオ・ナショナリズムとポピュリズムの波に翻弄されています。日本の若者たちは「私はダメだ」「俺はクズだ」と思う人が米・中・韓と比べて突出しているという検査結果が出ています。スマホとインターネットの谷間に「わたし」という「個」が孤立し彷徨う 2019 年の現在です。まもなく、改元。日本を変えたあの 3・11 東日本大震災から 8 年です。3・11 を忘却の彼方に押しやるのではなく、忘却の痕跡を自らの身体に刻むのがわたしたち表現者（当事者）の仕事です。2015 年、東京と福島で開催したパレスチナ特集で来日したイエスシアターと福島の演劇人の交流は今も続いています。演出家：イハップ氏は「文化なしの闘争はない、社会にとって演劇は必要不可欠だと想える若い世代を育てたい」語った言葉は今も生きています。この想いがこの事業の根本です。

2020 年代をどんな時代にしたいのか？ が演劇人に問われています。少子高齢化の超格差時代到来が予測される時代、わたしたちは決してネオ・ナショナリズムやポピュリズムに屈することなく国境を越え世界の演劇人たちとともに歩んでいきます。

また、企画の具体化にあたっては、多くの研究者、翻訳家、評論家、関係各国の大使館、国際交流基金などにご尽力いただいていることに感謝、そして何よりも文化庁のサポートに厚く御礼申し上げます。そして、何よりも、この年鑑が多くの若い演劇人に読まれることを切に願っています。

(2019 年 3 月 5 日)

# 韓国特集

【INTRODUCTION】

**激昂する韓国演劇、台風の目パク・クニョン来阪！  
ユニークな俳優指導で、むきだしの演技を引き出し、  
鋭い目線で現代の韓国社会を抉る、パク・クニョン。  
共に組み合わせる絶好の機会、演劇人求む！**

企画：和田喜夫

## 韓国特集2017

昨年に続いてのパク・クニョン氏を講師としての特集です。昨年の開催時の参加者の反響が非常に大きく、次年度もぜひ来日して欲しいとご相談し、今回の大阪での開催となりました。関西ブロックの協会からの強い開催の要請もありましたが、パクさんご自身が関西での開催を強く希望されていました。その理由はもちろん、在日の人の最も多い場所だからです。

《作者自身の演出によるワークショップ》という内容は昨年と同様で、テキストに選んだ戯曲も『青春礼讃』でした。とは言え、昨年と同様に『青春礼讃』に描かれた事をそのまま再現するのではなく、登場する役のモノログを参加者全員が考えて発表し、それからチーム分けをして複数で描かれていないシーンを想像し、創造し発表するワークショップでした。

パクさんがこの方法を選ばれた理由は、「台本に書かれたものだけに集中すると、どういう風に演じようかということにしか関心が向かない」ことを危惧されているからでした。俳優とは何か、演出家とは何か、演劇とは何かを根本的に問い続けなければならない内容でした。今の日本の演劇にとって最も重要な問題を話し、探り合う、熱い日々だったように思います。

『青春礼讃』は、決して穏和な戯曲ではなく、「『青春礼讃』を書いた動機は、あらゆる人間に価値があるということを言いたかった。全ての人生に価値がある。その希望を書いた。」「この世で生きる価値のない人間はいるのだろうか」という言葉にあるように現代への問いかけの戯曲であり、「演劇は最下層から考えるもの」という信念から生まれた戯曲です。

参加者には遠く東京や、福岡からの若者もいました。予想を超える多くの参加者があったことは、本当に嬉しい出来事でした。日本では韓国の映画やテレビドラマは多く上映されていますが、演劇に関してはミュージカル以外は殆ど来日上演されることもなく、日本の劇団が韓国の戯曲を上演することもわずかしかありません。この流れを変えたいと切に思います。

今回の会場は、劇団未来のスタジオでした。パクさんの大好きな路地（コルモッキル）の匂いを持つ、手づくり感の溢れるスタジオで、この企画には最適の場所でした。通りすがりの在日の女子高生が表に貼ったポスターを見て見学に来られるという素敵な出会いもありました。日々のワークショップ終了後の交流会も、このスタジオで行うことが出来て、幸いでした。

この会場を提供して下さった劇団未来の代表の森本景文さんが、2018年4月20日に急逝されました。セミナー実施までの準備、期間中の心からのご配慮に、今も感謝の思いでいっぱいです。今回の韓国特集に繋がる大切な出来事として、ここにご報告させていただきます。

【 in 大 阪 】 会 場 ： 劇団未来ワークスタジオ

## 【ワークショップ】

■ 7 月 19 日 (水) 19:00 ~ 22:00

参加者の自己紹介に質疑応答も加わり、それぞれの出自だけでなく、抱える問題、演劇事情などを語る。

5 日間を共有するコミュニケーションが生まれる。

■ 7 月 20 日 (木) 19:00 ~ 22:00

登場人物の台本に無いシーンを、参加者が3分間のモノローグとして語り、チームごとに発表。それぞれのモノローグに対して全員が感想、質問し議論する。パク・クニョン氏の感想も加わり演劇理念も語られる。

■ 7 月 21 日 (金) 19:00 ~ 22:00

昨日とは別の登場人物の新たなシーンを作る。  
発表と議論が続き、作品に対する視界が広がる。

■ 7 月 22 日 (土) 13:00 ~ 16:00

2 日間で作ったストーリーを活かして、チームで 5 分以内の新たな 2 つの作品を作る。  
くり返し発表と議論。個人作業から複数での作業となることで、想像力は広がり、表現の深度も増す。

## 【レクチャー】

■ 7 月 22 日 (土) 16:30 ~ 18:00

パク・クニョン氏が自身の人生・演劇を語る。

## 【ワークショップ】

■ 7 月 23 日 (日) 13:00 ~ 17:00

チームごとに全員が参加する 10 分間の作品を作る。発表、そして感想と議論。  
個々が意見を出し全員が共有することで生まれる作品は、  
集団創作の新鮮な力が漲るものとなった。

全員の発表を終え、マッコリを飲みながら自由な会話が弾み、  
パク・クニョン氏の創作スタイルも語られる。

## 【シンポジウム】

■ 7 月 23 日 (日) 17:30 ~ 19:00

〔パネラー〕 パク・クニョン

〔ゲストパネラー〕 堀江博之 (劇団大阪/日本演出者協会 関西ブロック前代表)  
孫 高宏 (兵庫県立ピッコロ劇団)

〔司会進行〕 金子順子

「韓国・日本、現代演劇の“今”を考える」パク・クニョン氏が前政権下に受けた「検閲」「助成金阻止」の話題から始まり、演劇と社会の関係を探り、演劇の力について、ワインを飲みながら参加者も加わり議論を交わす。

※ ワークショップ使用戯曲『青春礼讃』 作 パク・クニョン 翻訳 石川樹里

## パク・クニヨン / 박근형 / 朴根亨 / PARK KUN HYUNG



1963年8月11日、ソウル生まれ。劇作家・演出家。劇団コルモツキル芸術監督。韓国芸術総合学校演劇院演出科 教授。正規の演劇教育、文学の授業を受けずに劇団に入団し、現場の直接経験を積む。1985年、劇団76団に俳優として入団、その後演出家、劇作家に転向。

2003年、劇団コルモツキルを旗揚げ。以来、韓国を代表する劇作家・演出家として劇団内外にて幅広く活躍。1999年に初演した『青春礼讃』で韓国内の演劇各賞を総なめにする。公演の客席最後列では有名映画監督たち（イム・スルレ、ポン・ジュノ、キム・ジウン、パク・チャヌクなど）がひそかに観劇し、パク・ヘイル、コスヒ、ユン・ジェムン、オム・ヒョソクなど魅力的な俳優陣は彼らの映画で次々と重要な役を演じる。代表作に『鼠』『青春礼讃』『代代孫孫』『キョンスク・キョンスクの父』『そんなに驚くな』『満州戦線』『哀れ、兵士』など、話題作につぐ話題作を制作。日本でもタイニイアリス、上野ストアハウス、青森県立美術館、池袋あうるすぽっと（フェスティバル・トーキョー）等で公演を行っている。日本の戯曲も上演、『ヒッキー・ソトニデテミターノ』（岩井秀人作）、韓国版『眠れない夜なんてない』（平田オリザ作）。現代、韓国演劇界のトップランナー。

## 【 THE TEXT 】

### 【 大 阪 】

ワークショップ 1 日目

7 月 19 日（水）19：00～22：00



○ **和 田** パクさんにぜひ講師で来てほしいと昨年より企画しました。パクさんの戯曲は、日本で翻訳されたものを読むのと韓国で実際に上演されたものを観るのとではかなりイメージが違くと強く感じています。何が違うのかということ、実際に作者自身に来てもらって一緒にやってみれば一番いいのではないかと考えてお願いしました。

パクさんの作品に心を惹かれたかきっかけは、まず、皆さんが今、手に持っている『青春礼讃』という戯曲を読んだこと。そして、2年前、新宿のタイニイアリスの最終公演でパクさんの『満州戦線』で、衝撃を受けたからです。それは、日本と韓国（当時日本名がついていた人たち）を描いた作品でした。すぐその場でパクさんに講師として是非やってほしいとお願いしました。

ざっくばらんに、身近にセミナーを進めたいというのがパクさんの望みです。5日間、これだけのたくさんさんのエネルギッシュな顔ぶれが並んでいますので、皆さんのびのびとやってください。

国際交流演劇セミナーは、普段遠い人だと思っていた方々と一緒に演劇にかかわるものとして身近に意見を交し合うということが目的です。パクさんも、“人間が仲良くなる”ということがモットーだと言われています。この5日間を充実した形で過ごしていただけたらと感じています。

日本と韓国の演劇の交流については、日本演出者協会としては、1992年に東京芸術劇場で「日韓演劇人会議」をはじめたのが最初です。

戦後の日本と韓国の演劇交流は容易ではありませんでした。1972年に唐十郎さんが許可なくソウルで『二都物語』を上演されたこともありました。日本演出者協会では韓国演劇協会と1992年から1年ごとに交互に韓国と日本で会議を開催し、会議の他にワークショップを行ったり、演劇公演を互いに観て意見交換をおこなったりしていました。

さらにもっと深い交流をはじめたいということから、1998年より日韓演劇交流センターという名前で、日本の7つの演劇統括団体と韓国の多数の団体で交流しようと提案しました。主には戯曲の翻訳紹介というかたちで、ずっと続けています。

その交流で作られた翻訳集も出版しています。

さらにもっと深めたいと日韓演劇フェスティバルを2度ほど開催しました。最初の2009年は東京のみの開催でしたが、日韓といえば大阪は重要な都市です。2012年にはそれに福岡を加えた3都市で開催しました。在日の演劇人、詩人、音楽家などのみなさんと連携しての企画内容としました。いま、政治的にはいろいろな問題もありますが、演劇人としてはお互いに学び話しあい、少しでもこの対立的な状況を演劇人によって打開できるといいと思っています。

今回どんな内容になるか、私自身も想像がついていませんが、大きな出会いになると思います。それではご紹介いたします。パク・クニョンさんです。通訳はホン・ミョンファさんです。

○ **パク** こんにちは、私はソウルで演劇をやっているパク・クニョンといいます。本当に夢みたいです。

大阪にきて演劇をやっている方、演劇に関心を持っておられる方に会えるということを想像していなかったのが本当に嬉しいです。

去年は、東京と松山でワークショップを開催しました。私は演劇メソッドや、“演劇はこうあるべき”というものは、なにもありません。自分の感じたこと、体験したことを分かち合い、互いにあげたりもらったりし、それをちょっと考えてみようかなという感じで進めるスタイルです。

たぶんこのワークショップもそういった形で5日間進めて行くことになると思います。今年は何をしようかと考えたのですが、去年やった『青春礼讃』がいいのではと勧められ私自身もそれがいいと感じたので『青春礼賛』を元に進めることにしました。



『青春礼讃』は、反抗して生きる若者がいて、その周りを取り囲む大人たちがいて、その中に生まれるいろんなものを描いた作品です。先が真っ暗に思っている若者がいて希望のない若者がいてそれを取り囲み見守る大人がいて、どうするっていうなかで、体の不自由な人が子供を産んで…という物語です。

その子供というものが“希望”となって自分たちは夢を見るけれども上手くいくかどうかは分からない。

## ■人生、演劇を共有しましょう

テキストという形で『青春礼讃』をお渡ししていますが、それをどういう形で“使う”かは、もしくは“使わない”ということや、最終的に「発表」をするかしないかも皆さんと相談しながら決めていきたいと考えていますが、いかがですか？

正直にいうと、最終日の「発表」などは、ない方が“楽”といえは“楽”ですが、「発表」をしないと“あれ、何しに行ったっけ…”となってしまうものです。従って、どういう形になるかは分かりませんが、最終日には何かするという事で進めていきたいと思っています。

その「発表」に向けて、チームごとに分かれていただき、それぞれが「何をするか」決めることになります。

テキストにあるシーン、テキストに描かれていないその前後、例えば、登場する前の誰某、登場した後の誰某、実際には登場しないが名前だけ出てくる人の裏物語を作って「発表」でも大丈夫です。

まず自己紹介をしてもらいますが、そのあとは、チーム別で分かれてやってもらおうと考えています。

本日は水曜日です。日曜日まで、本当に短い期間です。こんな短い期間に大きな成果を得ることは無理だと思います。大阪で、パク・クニョンに出会って「私の演劇観が変わった」ということも絶対ありません。何かを教わって“どう”とかいうのではなく、こうやって集まって老若男女が、お互いにお芝居だけではなくて人生を含め、演劇を含めた悩みや困ったことを共有することで親しくなっていくことから、新しいことが生まれていくと信じています。皆さんにとって、今後もっと演劇をやっていく上での小さな“種”になっていくといいなと思っています。

皆さんが気になっていること、韓国のこと、私個人のこと、韓国演劇の主流ではないですが、韓国演劇で気になっていることや、私の演出スタイルのことでも聞いていただければお答えいたします。韓国の演劇の始まりは、日本の築地小劇場です。韓国の人たちが学んで持ち帰って始まったと考えています。もちろん日本の新劇も当時の演劇人文化人たちが、ヨーロッパなどに行って日本に持ち帰って新劇というものができたようです。その当時は一方的にヨーロッパから“教わって”という発展の仕方だったと思います。今は時代が変わって相互の交流になっている。そこからどんどん発達していると思っています。

韓国の劇作家は日本の劇作家にすごく関心を持っています。それは、韓国の劇作家が日本の劇作家を見た場合、とてもたくさんの種類があって、多くの書く人がいて、作品が多様だからです。その点に関して、いつも韓国では日本がうらやましいと思っています。

逆に日本の人が韓国に関心を持っていただいている部分は、外に出す部分や演出の部分であると理解しています。今回のワークショップでお互いが気になっている部分をもっと出しあって、今後の韓国と日本の演劇交流が深まることを皆さんで進めていきましょう。お酒を飲みながら…。

皆さんは『ハリケーン』という漫画を知っていますか？ この空間（劇団未来ワークスタジオ）がすごく好き。ボクシングの『ハリケーン』という漫画のところみたいです。その会場みたいです。髪の毛がこう垂れていて…（参加者から「あっ、『あしたのジョー』？」）題名が分からないのですが。では、床に座りましょう。自己紹介の時間にしたいと思います。

自分が誰で、どこから来て、何がしくて、こんな悩みもあるんです。そんな話をしましょう。自己紹介をしてもらった後に、チームに分かれてもらいます。では、こちらから自己紹介して、10人くらいしたら休憩します。私に言うだけでなく、皆さんに言ってくださいね。

## ■自己紹介

### ●紹介者への質疑応答も加わって進む

○ **パク** 今年の東京・松山でも感じましたが、韓国は日本のちょうど半分くらいです。距離的にも釜山とソウルなどでも近い。しかし、違う都市でやっているワークショップに違う都市の人がやってくるというのはまずない。もちろんソウルに地方都市の人がやってくることはあるが、その逆はないのでとても奇特で特別な経験です。ワークショップだけでなく、日本人の、自分の好きなものを追いかけていくという“情熱”は素晴らしいなと思っています。去年もわざわざ休暇を取って松江から車で松山まで来ていただいた方もいた。続けましょう。

## ■初めてのワークショップ

○ パク さっきも言いましたが、私のワークショップは、全然特別ではありません。

東京の江古田にストアハウスという劇場があります。今は上野に移動しておりますが、そこで私に何時間かワークショップをやってほしいと依頼をされたことがあります



ました。公演をしにストアハウスに行ったにもかかわらず、突然ワークショップをしてほしいと言われたのです。私自身ワークショップをやったこともないし興味もなかった。鞆の中を見ると酒瓶が入っていたので、みんなに囲んで座っていただいた。そして、私は言いました。「今からワークショップに参加する資格として、一杯ずつ飲まなければならない。参加するためには」

アジアのいろんな人が来られており、日本人・中国人・韓国人・フィリピン人がいましたが、そして通訳者がたくさんいます。私が一言という、いろんところで通訳が始まりました。

言いたいことをこれからお話ししますが、「マフィアゲーム」をご存知ですか？ 簡単に説明すると、参加者全員に目を瞑っていただき、誰か（この場合で言えば私）にマフィアを選んでもらいます。触られた人しか分からない。触られた人がマフィアです。皆が目を瞑っている状態でマフィア同士は目を開けて確認してもらいます。それでマフィアが決まった後、通訳なしでいきます。ゲームの目的はマフィアを探すこと。何人かでマフィアを指名していきます。指名された人は死にます。生き残らなければならないサバイバルゲーム。お互いが観察し合い、この人は“マフィアではないか？”ということ“だましまされ”をする。マフィアは何とかして生き残らなければならない。マフィアは嘘もつかなければならない。それは芝居も同じですね。俳優は舞台上でリアルとして嘘をついている。大切なのは、通訳は全員出ていくこと。

ゲームの目的はマフィア探しですが、通訳なしのまま必死で参加者が知っている言葉（中国やフィリピン語など）で話しかける。“あなた、マフィアじゃない…!?”。4時間もらっていたワークショップの時間は足りませんでした。みんな興奮して、お酒もなくなりました。

それが私のはじめてのワークショップでした。

でも、本当にマフィアはマフィアとして生き残らなければならないし、嘘だけど必死で演技しなければならない、皆にとっても情熱的にやっていただけました。マフィアは、マフィアじゃないけれどマフィアというリアリティをもって説得できる演技をしなければなりません。芸術監督の木村さんから“なんか変なワークショップだったけど、よかったんじゃない？”とっていただきました。さきほど、あまり他所のワークショップとか知らないと行っている方がいたので、このような話をしましたが、私も全然知りません。

こうやって集まって話をして仲良くなっていくのがワークショップだと思っています。何より大切なことは、“共に過ごす”ということだと思っています。経験の多い少ないも関係ないと思います。

## ■全員の自己紹介が終わり、チーム作り

○ **パク** 22名の皆さんのお話とても楽しかったです。年齢も経験も含めてさまざまな方がこの場に集まっています。

ちょっと無謀な投げかけをいたします。4チームに分けようと思いますが、皆さんでなんとなく決めてください。22名<5名×2チーム・6名×2チーム>。

“この人とやりたい”“座っているからこの人たちで”何でも結構です。それでは5分で決めてください。よろしくお願いいたします。



## ●チームができる

○ **パク** チーム別に集まって座ってください。チーム名を3分で決めてください。

## ●チーム名発表

○ **パク** 宿題を出します。明日、それぞれ発表してもらいますが、個々で台本に登場する人物、その中から自分が想像する人物、男性の役を女性が、女性の役を男性がやっても構いませんが、その登場人物の台本に無い（それは過去だったり未来だったり）3年後や5年後などを各自で作ってきてください。もっと長くてもいいです。発表は一人ずつです。

例えば登場人物の「ヨンピルの10年後」、警察官になっているかもしれない。青年の息子が10歳くらいになっていて、ヨンピルが取調べをしているかもしれない。その先の出来事は誰にも分かりません。

もしくは、テンカンの青年は死んでしまい、自分の子供を幼稚園に連れてくるシーンが5年後にあるかもしれない。

それをモノログ（独白）という形で作ってもらい、台本に無い期間にこんなことがあったということが、観客に伝わるようにしてください。

3分間、演って、皆でそのモノログについて話をする時間を設けます。3分ほしい人は言ってください。

チーム内で、「2人の対話で作りたい」というのも結構

です。最終的な目標として考えているのは、台本にあるものを

そのまま発表するのではなくて、そこから派生して生まれるものを膨らましていって、チームごとにシーンを作ることができればいいと思っています。

例えば、『オイディプス』がシェイクスピアの王と王妃の話しにすり替わっていく」ということや、『オイディプス』の母と話しているシーンを通して、『ハムレット』が伝わってくる」ということもあ



ります。(あくまで、シーンの話ですが) 私個人の考えですが、作家のチェーホフのシーンとリンクして感じることもあります。

同じ『青春礼讃』というテキストですが、そこから生まれてくる違う世界が発表の日に見えると良い、それこそが意味があると考えています。

なぜ俳優なのに、「新しい物語を自分が作らなければならないのか？」という人がいるかもしれません。完全に主観的な経験から感じたことですが、与えられた台本の台詞を言うよりも、俳優は自分の体の中から生まれた台詞を言うときの体の方がとても説得力があり、とても素敵に見えます。

特に現代演劇においては、俳優というものが自分の想像力で膨らましていける力を備えなければならないと思います。

質問は？

○ **参加者** チームで作るのですか？ ひとりひとりで作るのですか？

○ **パク** まずはひとりひとりで作ってください。

協力して夫婦役でやってもらっても結構です。

面白味は、それぞれの作ったモノローグを観ている側の人たちが、この役とこの役でまた別の物語が発見されることもあります。そしたらまたそこから、新しいチームとストーリーが生まれます。

その辺は自由にやってください。

ワークショップ 2 日目

7 月 20 日 (木) 19 : 00 ~ 22 : 00

## ■ 試演と合評

● 全員がモノローグを発表

● チームで登場人物の台本に無いシーンを創る

○ **パク** チームの全員が終わったら、いま観たものを全員で話します。

1 人ずつではなくチームごとに行きます。

それでは、1 番バッターからよろしく願いいたします。

「チーム」と「名前」を言ってください。

● 以下、個々のチームの試演内容に関するやりとりは省略します。

## ■観客が興味を持つ状態

○ **パク** 今回のワークショップでは、「即興」で作ってもらっています。内容は整理されていませんし、それは戯曲化する上で、分析して整理されていくものです。「考え方」が違うのは当たり前のことですし、いいことです。そして議論するのもいいことです。このワークショップで観ていただきたいのは、「内容」よりも「体」「演じ方」がポイントです。

「経験」も「表現力」も「表現の仕方」もすべて違いますが、観ている人が演じられている人を観て“あれ？これは何だ？”と気に掛かっているものを観客に与えなければならないと思います。聞いている人に集中する。それは良い悪いは関係ないのです。観ている人が興味を持つ状態が大切です。

観客の立場（観る立場）で考えた場合、どんなに演技が上手くても“こうなるだろうな”と予測できると興味は失われてしまいます。どの瞬間でも、こっちに興味を持たせなければならないと思います。だからといって、突発的なこと、変なことをするというものではありません。

## ■韓国の教育の現状

○ **パク** 韓国における教職員労働組合は日本にありますか？（○参加者 あります。）

韓国では、教職員組合に入ると学校から追い出されました。正しい教育をさせる目的で全国教職員組合はできました。しかし、国からは弾圧を受けていました。やっと正式に合法化された社会背景があります。そこでちゃんとした教育をしようとする（裏口を使わない）先生という存在について、韓国の観客はすぐ感じます。台本にはそこまで書かれていませんが、社会背景として韓国の観客はすぐに分かります。ここに登場してくる先生は、子供に対してきちんとできなかったという罪責感から、辞めるという選択をしたということまで膨らまして観ています。

## ■「自分の時間」における表現と表情

○ **パク** 今回も新鮮なシーンがありました。東京でも松山でもやりましたが、皆さんとても個性的な方が多くて良いと思います。私はダメだしをしようというわけではありません。こうするともっと面白くなると思うということ言うだけで、決して指摘だと受け取らないでください。

いろいろな表現・表情があると思いますが、私の場合は「自分の時間」というものがあると思います。「自分の時間」における笑い方、泣き方、怒り方があると思います。勿論俳優は「笑い方」においてもA・B・Cと、いろいろな表現を持っていると思います。

「嬉しい」という感情が、自分に生まれていないのに、「はははは」と笑う必要はないです。体が十分に満たされると、観ている人は感じます。泣くのも同じだと思います。もちろん「笑わなければならない」「泣かなければならない」こともあると思います。しかし、「楽しくても」「悲しくても」無理に声に出して表現する必要はないと思います。



笑いが自分の中に溢れなければ声に出す必要はないと思います。そういう気持ちでさえいれば、それは伝わると思います。

色を例に説明いたします。例えば「赤い色」。俳優が「赤い色」をすれば、観客は「赤」として観ますよね。それは悪いことではありません。俳優が「青い色」をすれば、観客は「青」として観ます。ひとつの「色」の中にもいろんな色があります。俳優のイメージの「色」があったとしても、観客にとっては「赤」に観えたり「青」に観えたり、違うように観えたりする。「この色です」と伝えてしまうと、観客は興味を失ってしまいます。ややこしい言い方をして申し訳ありません。ただ「嬉しい」であれば、ただ嬉しくあればいい。「憂鬱だ」それを自分の中に持っていれば、何を言おうがそれは出てくるものです。「嬉しい」「悲しい」を表現してしまうと、説明しているので、観るものがなくなってしまいます。演じている人が不安定でいた状態は、観客にとっても「何を考えているだろう」と思う。それは、観客と俳優が一緒に進んでいっている。「喜び」を喜びとして押し付けてしまうと、観客には負担になってしまいます。

「劇場の大きさ」「経験」「作品」によって変わります。「コメディ」はリズムも違います。自分の中で自分の感情として持っていれば、それは情緒として残りますが、「情緒」として説明してしまうと、そこで一瞬にその「色」は単調なものになってしまう。

明日ですが、発表を続けます。明日は、また、別の役をやってください。同じ形態（形式）にいたします。明日は、少し早く終わって土曜日の課題へむけて、たっぷりお伝えいたします。

個性的な方が多く表現がさまざま、すごく上手な方が多いと思いました。とてもたくさん学びました。すごく楽しくて面白かったです。明日も違う役で挑戦してもらって、想像を加えて表現してもらえたらと思います。

今日やってもらって、明日（3日目）また別のものを考えてほしいというのは、それらを融合させたものが明後日（4日目）に来ます。

お疲れ様でした。



続き、詳細は、

国際演劇交流セミナー2017-2018 年鑑にて

# 国際演劇交流セミナー2017-2018

## 年 鑑

### ■ 目 次 Index ■

#### 2017

デンマーク特集 - ワークショップ・リーディング・シンポジウム	1
韓国特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	21
インドネシア特集 - ワークショップ・レクチャー	49
フランス特集 - ワークショップ・シンポジウム	93

#### 2018

台湾特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	131
韓国特集 - ワークショップ	151
スイス特集 - ワークショップ	181
アルゼンチン特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	199
国際演劇交流セミナー実施年表【1999年～2016年】	241



■ ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL : 03-5909-3074 / FAX : 03-5909-3075

E-mail : j\_d\_a\_info@yahoo.co.jp